

INTERVIEW

岩手医科大学 救急・災害・総合医学講座
総合診療医学分野 教授
下沖 収 先生



岩手県の地域医療を支え・育てる

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

外科医であり、地域医療医であり

山田隆司(聞き手) 今日岩手医科大学の内丸メディカルセンターに下沖収先生を訪問しました。先生がこの総合診療科の教授に就任されてもう4年ですね。岩手県の支部会には私も何度かお邪魔したことがあります。岩手県の卒業生はとてもまとまりがあるのを感じます。先生がこういうポジションでご活躍されていることも、非常に重要な一助になっているのではないかと思います。ぜひ今回はそのようなお話を伺えればと思っています。

まずは、先生のこれまでのご経歴を簡単に紹介していただけますか。

下沖 収 私は自治医科大学を1988年(昭和63年)に卒業しました。昭和最後の卒業生です。岩手県の

中で、自治医大卒業生の初期研修制度がしっかりできはじめた頃で、私たちは、1987年に新築移転した岩手県立中央病院で、研修することになりました。

山田 それまでは違ったのですか。

下沖 はい、それまでは岩手県立宮古病院や久慈病院などの沿岸の県立病院で研修する卒業生が多かったです。私たちの1つ上の学年が県立中央病院の研修医の1期生で、私たちが2期生になります。県内で一番規模が大きく、大勢の医師がいる病院で研修できたことで、多くの先生にお世話になれたのは本当に良かったと思います。当時はローテーションを自由に組むことができ、私は外科系ローテーションで研修しました。そ

の後、3年目、4年目は県立釜石病院の外科に赴任しました。今でいう外科専門研修をしたこととなります。外科医として手術もたくさんさせてもらいましたが、麻酔科の常勤医がいなかったため、外科医の下っ端として各科の麻酔もかけました。いろいろなことをさせていただき、とても楽しい2年間でした。

山田 3～4年目の釜石病院というのはいわゆる義務としてのへき地勤務ではなく、義務年限内の研修ということですね。

下沖 外科医としての修練ですね。その後当時の岩手県立住田病院へ赴任しました。ここは現在、岩手県立大船渡病院附属住田地域医療センターになっています。

山田 小さな病院だったのですか。

下沖 はい。当時は院長先生が内科医、外科医が私で、常勤2人でした。

山田 何床ぐらいあったのですか。

下沖 55床でした。

山田 そこでも手術をやっていたのですか。

下沖 全身麻酔手術も年間50件程度はやりました。自分で麻酔をかけて、自分で手術をし、術後管理も自分でやるという感じでしたね。それから陸前高田市の広田診療所で3年間勤務しました。ここは、医師一人の国保診療所でしたが、とても楽しかったですね。

山田 その3年間で義務年限は終了したわけですね。

下沖 最後の3年間は、特に楽しく過ごさせてもらいました。人口5千人ぐらいの半島でしたので、結構患者さんは多かったです。

義務年限が終了し、その後に岩手県の内地留学制度を利用して、岩手医科大学の細菌学教室で2年間基礎研究をしました。

山田 その時に岩手医大にお世話になったのですか。どうして基礎を勉強したいと思ったのですか。

下沖 大学の同期生が大学院で研究していたりして、その発表を聞く機会が時々あったのですが、そうすると自分が科学的な話に全くついていけないことにちょっとコンプレックスを感じて……。

山田 現場に送り込まれて、最前線でそれなりにやりがいを感じているものの、学会などへ行くとやはり医師としてアカデミアみたいなものに憧れるところがあるものですが、それが細菌学だったということですね。そのときはまったく臨床はせずに？

下沖 岩手医大の外科で臨床も研修しました。手術も入れてもらい、病棟も持っていました。

山田 細菌学で学位は取られたのですか。

下沖 はい。その2年間の研究内容でいただきました。

山田 2年間で終わった後はどうされたのですか。

下沖 岩手県立久慈病院に外科医として赴任し、結局そこに16年間いました。

山田 そこは、外科医は何人くらいいたのですか。

下沖 大学の医局からの若い先生のローテーション病院になっていましたので、4、5人いました。研修医も常時いました。手術や化学療法だけでなく、各科の緩和医療なども外科が担当していましたので、いろいろなことができてやりがいはありました。